

はあ……やっぱり三日まともに寝てないと、無理があるわね。

王氏様に休暇をお願いしてみようかしら。

こちらになります。

やあ、薬師のお嬢さん、例の睡眠薬はもうできたかな？

よく効く薬ですの
で、用法を守ってお
使ってください。

私はお茶菓子で
も……。

お札に異国のお茶を
持ってきたんだ。一緒
にどう？

いくら異国のお茶とはいえ……こんな味がするなんて……？

これって、まさかさっき渡した睡眠薬の……？！

まさか、この宦官、私に睡眠薬を？

でも私には効かないはず……あれ？

どうして……目の前が回って……？

たしかに毒は……私には効かない、

はずなのに……

翡翠宮の香味役の侍女が特異体質であるという噂は、以前から耳にしていた。

だが、ここ数日観察してみたところ、近頃はどうかやら無理をしている様子が見受けられた。
となれば、最近手に入れた異国の茶と、あの娘が自ら調合した薬とを組み合わせれば——あるいは、と思ったのだ。

そして、結果はこの通り。見事に成功したようだ。

これで、かつて我を手玉に取ったあの娘に、ようやく復讐を果たすことができる。



恐る恐る、片手で彼女の顔を開いてみる。

いつも鋭く万事を見抜いていたその双眸は、今や正面を向いたまま、どこか虚ろで焦点も定まっていなかった。

——なるほど、彼女の調合した薬は、やはり効き目があるようだ。

んいっ

ア……

ア……

もちろん、ただそのまま服用させただけでは効果はなかっただろう。

だが、苦勞して手に入れた異国の茶と組み合わせ、自らの身を実験台として昏睡効果を確かめたうえで、ようやくここまで辿り着いたのだ。

当分は、彼女が意識を取り戻すことはないだろう。

薬の調合を試しているうちに、もう一つ奇妙な効果も見つけた。

——それは、眠りに落ちる直前の記憶が完全に消えてしまうというもの。

まさにその効能があったからこそ、こんな大胆な真似も可能だったというわけだ。



いつも足元まで垂れていた裳を、そっと捲り上げてみる。

後宮に仕える女たちは、基本的に肌を晒すことを許されていない。
そのため、まるで何重にも身を包み、己の存在を隠そうとでもしているかのような装いが常だ。

そうした中で、こうして久方ぶりに若い女の生足を見ると……
すでに失ったはずの本能——性欲という名のそれが、かすかに脳裏を掠めた気がしないでもない。

……とはいえ、気のせいだろう。
その感覚にすら、今やどこか他人事のような距離感しか覚えないのだから。



上衣も丁寧に緩めてみれば、意外なほどに痩せた身体が現れた。

前にも述べたが、この後宮では女たちは全身を布で覆い隠しているため、衣服の上からでは肉付きの具合を判別するのは難しい。

よくよく観察すると、同年代の女子と比べても、かなり細身の部類に入るようだ。胸元も、女の象徴と呼ぶにはいささか寂しい。

——まあ、世の中にはこういう体型を好む趣味の者もいると聞く。私には到底理解できないが、そういう嗜好も存在するのだろう。……どうでもいい話ではあるが。

今度は、彼女の片目を上下に軽く引き開いてみた。

瞳の位置は先ほどとほぼ同じだったが――わずかに、ゆっくりと動いている。

んじ、

スー……

スー……

しばらくじつと観察していると、窓から差し込む光に反応して、彼女の瞳孔が徐々に収縮していくのが確認できた。

光反応は、まだ残っているようだ。



この特異体質のせいで、薬の効果が長く持たないのでは——と疑念がよぎった瞬間、私はようやくこの場所が「薬房」であることを思い出した。

案の定、棚の上には彼女が普段から麻酔薬として使っている薬瓶が置かれており、それを手に取るのは難しくなかった。

……やはり、こういう時に限って運が味方するらしい。



私が実験した際には、あの異国の茶と睡眠薬の組み合わせだけで、これほどまでの昏睡効果が得られた。だが、やはりこの娘は一筋縄ではいかない。

副作用があるかもしれない——そんな懸念が頭をよぎるも、今はそれを考えている余裕などない。

もしこの状況を誰かに見られたら、間違いなく私は絞首刑に処されることになる。実に理不尽な話ではあるが、それがこの宮廷の現実というものだ。



しばらく時間を置いた後、彼女がどの程度の睡眠状態にあるかを確認するため、
瞼を開き、眼球に軽く触れてみた。

くー……

くー……

もし意識が残っていたならば、この行為には反射的に目を細める反応が見られるはずだが――
案の定、そうした気配は微塵もなかった。

どうやら再び、深い昏睡状態に入ったようだ。

彼女の両目を開いたまま、無理やり固定してみた。

こうしておけば、いちいち瞼をこじ開ける手間もなく、状態の変化を観察できると考えたのだ。

行き場を失った瞳はしばらく虚空を見つめていたが、やがて左右それぞれが気ままに、ゆっくりと動き始めた。

く……

く……

——夢でも見ているのだろうか。
いや、見ているとしても、きつと断片的な記憶の残滓か幻覚に過ぎまい。



今度は口腔の確認に移る。彼女の顎をゆっくりと開けてみた。

完全に意識がないせいか、その動きは驚くほど滑らかだった。
顎関節にはほとんど抵抗がなく、自然と開いていく。

がー……

がー……

開かれた口の奥には、鮮やかな桃色をした小さな舌があり、
わずかな光を受けてうっすらと輝いていた。



そのまましばらく様子を見てみると、どうやら呼吸が苦しくなったのか、舌がふいに外へと滑り出た。

見た目にも非常に柔らかそうな舌である。

彼女の両目は今や好き勝手に動き回り、結果として、顔全体の印象がかなり奇妙なものになっていた。

——冷静に観察すれば、人体というのはこうも簡単に「異形」に見えるものなのか、と妙な感心すら覚えた。



長く瞼を開かれていたせいか、彼女の目には涙が溜まり、
ついには頬をつたって零れ落ち始めた。

——これだ。

私が見たかったのは、まさにこの光景だった。

ガァ……

ガァ……

いつも何を考えているのかわからない、冷やかな表情で他人の弱点ばかりを突いていた
あの娘の頬に、こうして涙が伝っていくのを眺めていると……

胸の奥が妙にすつとするのを感じた。

下着を取り除くと、予想通りの貧相な胸が現れた。

ふくよかな胸の持ち主ばかりを寵愛する今の皇帝の趣味からして、この娘が御床に呼ばれることは、おそらく一生ないだろう。

かー……

かー……

こうして誰かに胸を見せるのは、おそらく私が初めてなのだろう——
そう考えると、何とも言えない優越感が胸をよぎった。

ふと意地悪な気持ちになり、彼女の乳首を強く引っ張ってみた。

すると突然、彼女の体がびくりと跳ね上がった。
反射なのか、あるいは残存する神経反応なのか。

キュッ

ドクッ

——この貧弱な体でも、女としての機能は一応備わっているということか。
もつとも、性欲を持たない私にとっては、どうでもいいことではあるが。



下腹部には、まだ完全には育ちきっていない産毛がわずかに生えていた。

体質なのか、それ以外の部位にはほとんど体毛が見られず、恥丘のあたりに少量が固まっているだけである。

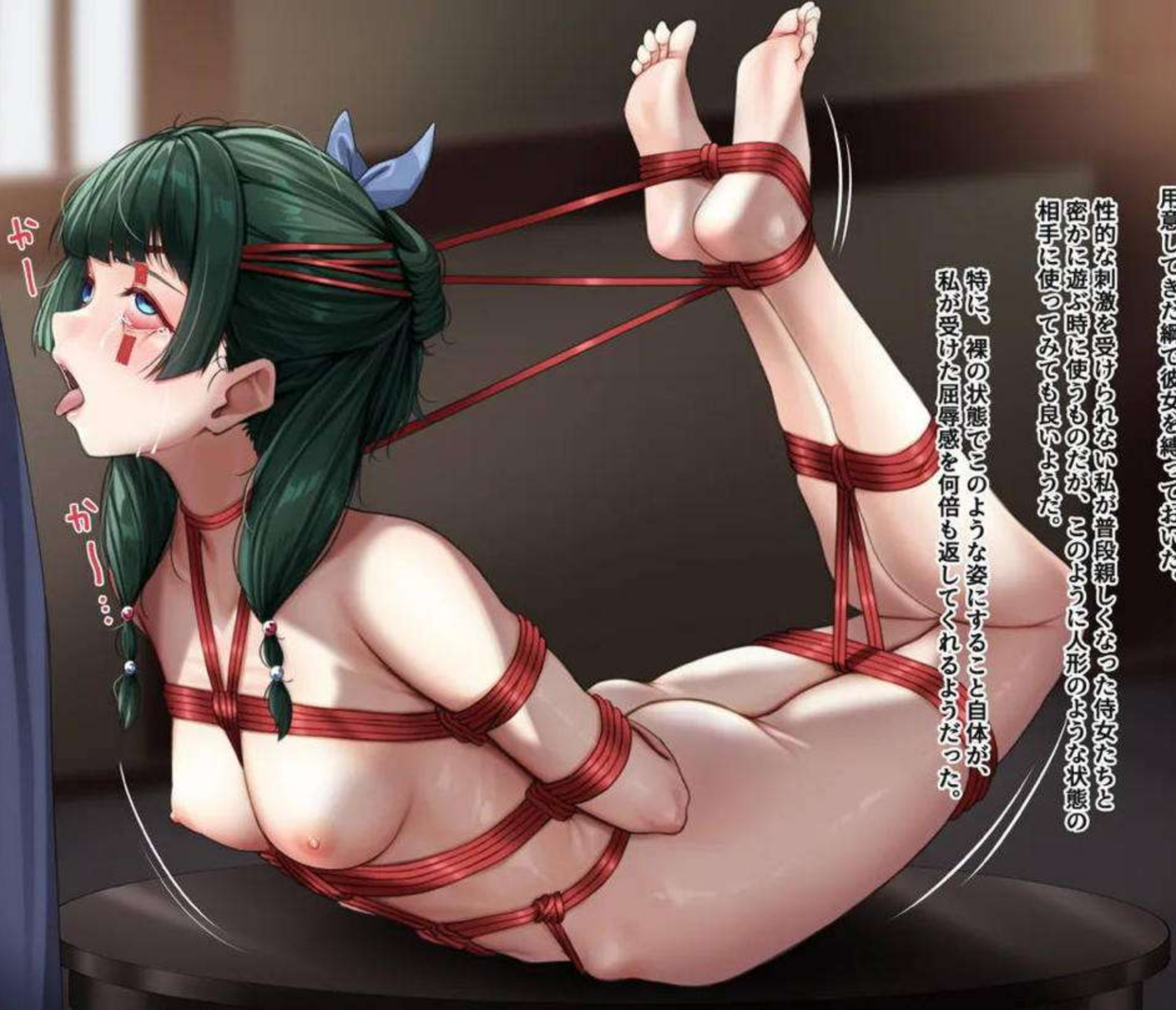
脚に至っては言うまでもなく、つるりとしたもので……

それよりも、この細さでは一体何を食べて生きているのかと問いかけたくなるほど、極端に痩せていた。

用意してきた綱で彼女を縛っておいた。

性的な刺激を受けられない私が普段親しくなった侍女たちと密かに遊ぶ時に使うものだが、このように人形のような状態の相手に使ってみても良いようだ。

特に、裸の状態でこのような姿にすること自体が、私が受けた屈辱感を何倍も返してくれるようだった。

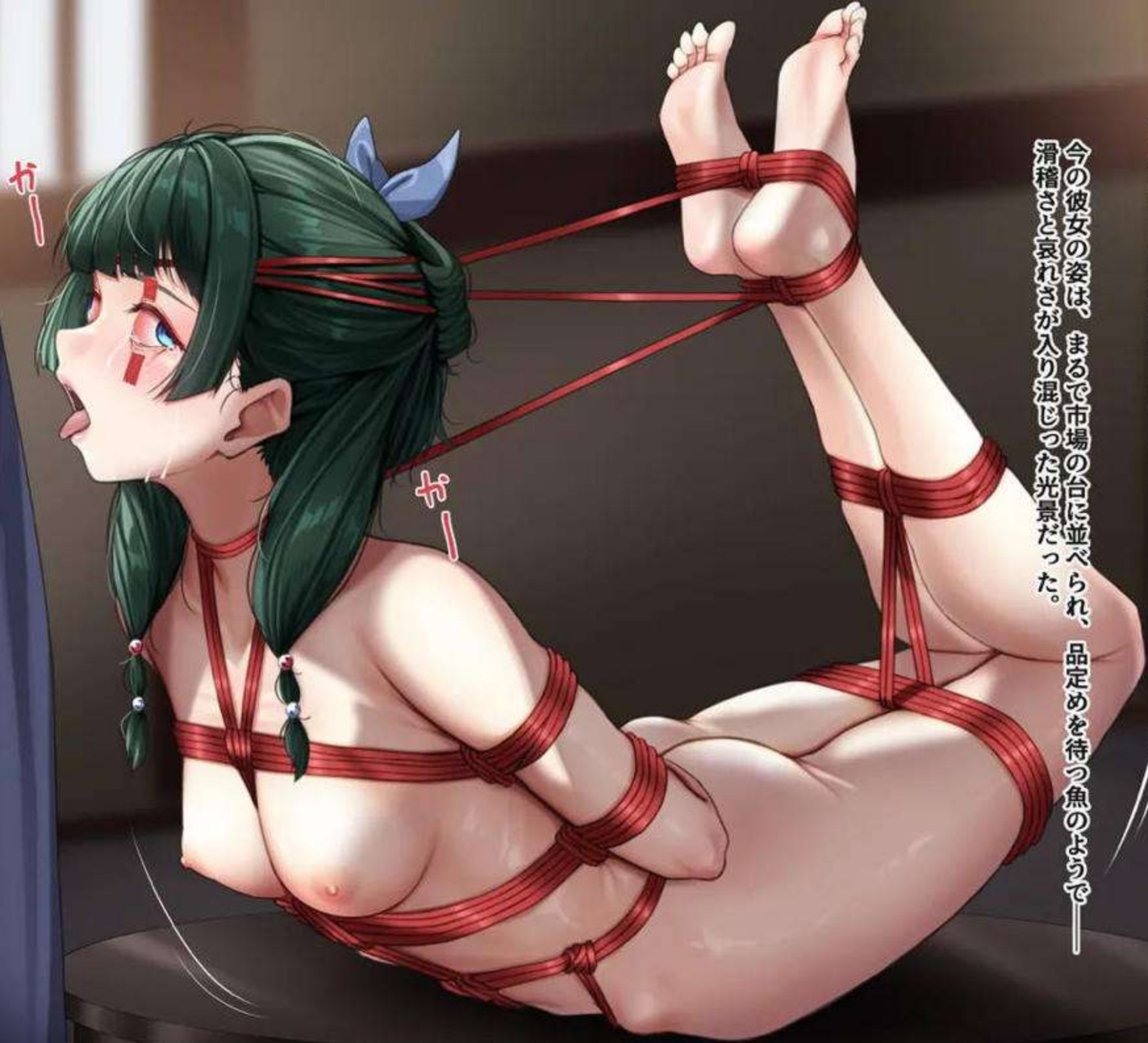


かー

かー...

つい先ほどまで、彼女とこの机を挟んで茶菓子を楽しんでいたというのに――
まさか自分自身が、裸のままその上に横たわることになるとは、
彼女も夢にも思わなかっただろう。

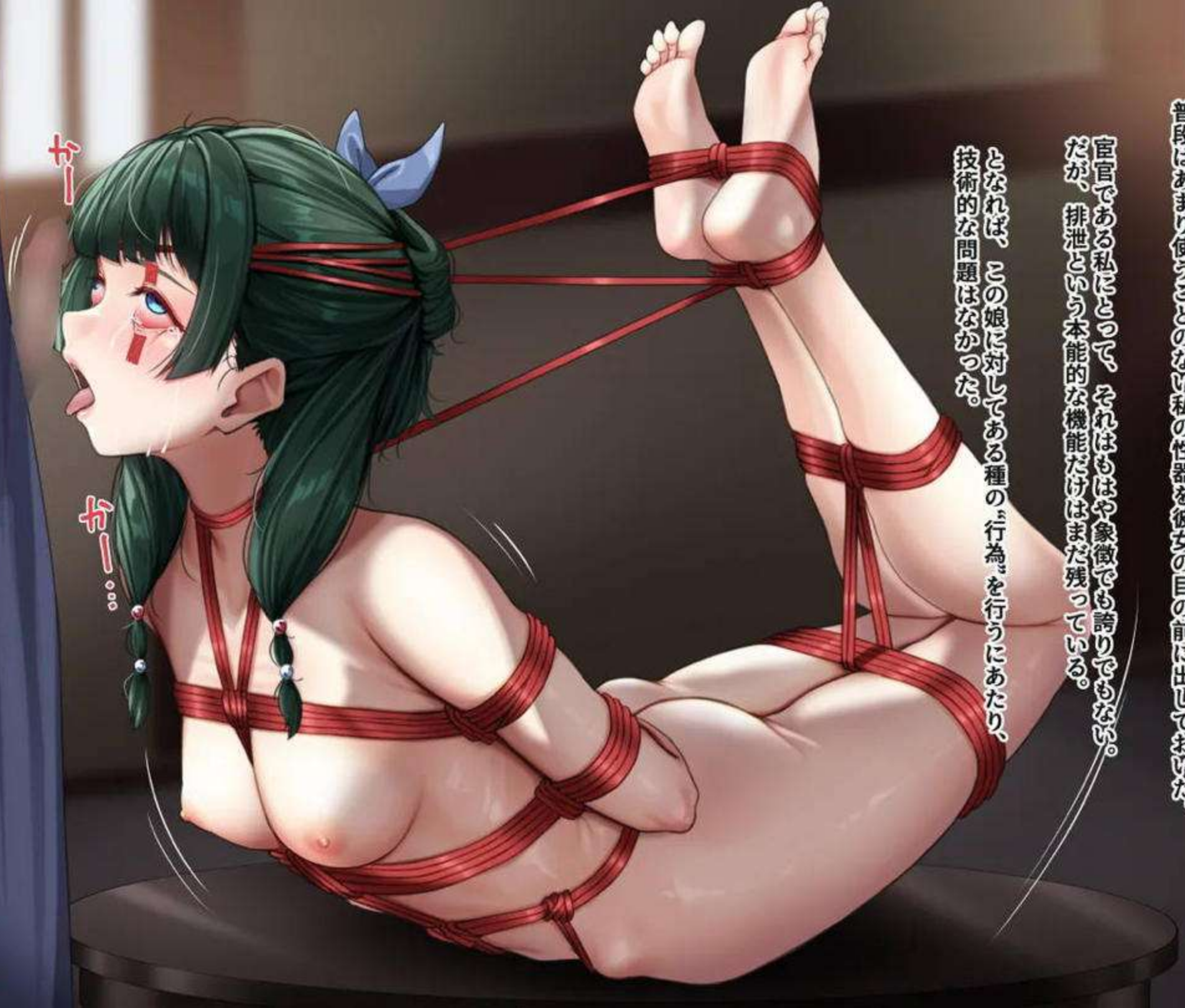
今の彼女の姿は、まるで市場の台に並べられ、品定めを待つ魚のようで――
滑稽さと哀れさが入り混じった光景だった。



普段はあまり使うことのない私の性器を彼女の目の前に出しておいだ。

宦官である私にとって、それはもはや象徴でも誇りでもない。
だが、排泄という本能的な機能だけはまだ残っている。

となれば、この娘に対してある種の「行為」を行うにあたり、
技術的な問題はなかった。

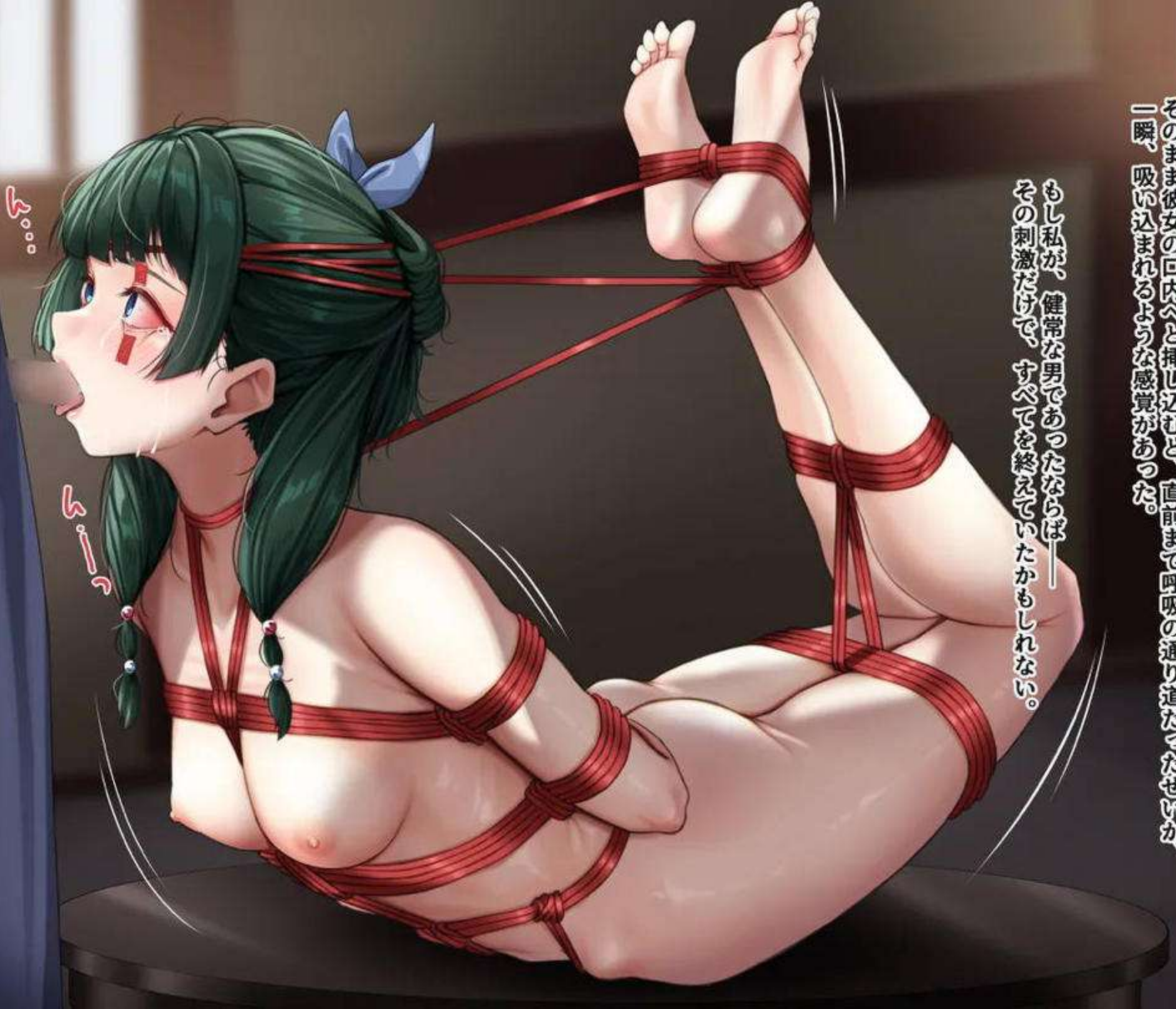


カー

カー...

そのまま彼女の口内へと挿し込むと、直前まで呼吸の通り道だったせいか、
一瞬、吸い込まれるような感覚があった。

もし私が、健常な男であったならば――
その刺激だけで、すべてを終えていたかもしれない。



私の体から出せるものなど、たかが知れている。
わずかに滲む透明な液体。それだけだ。

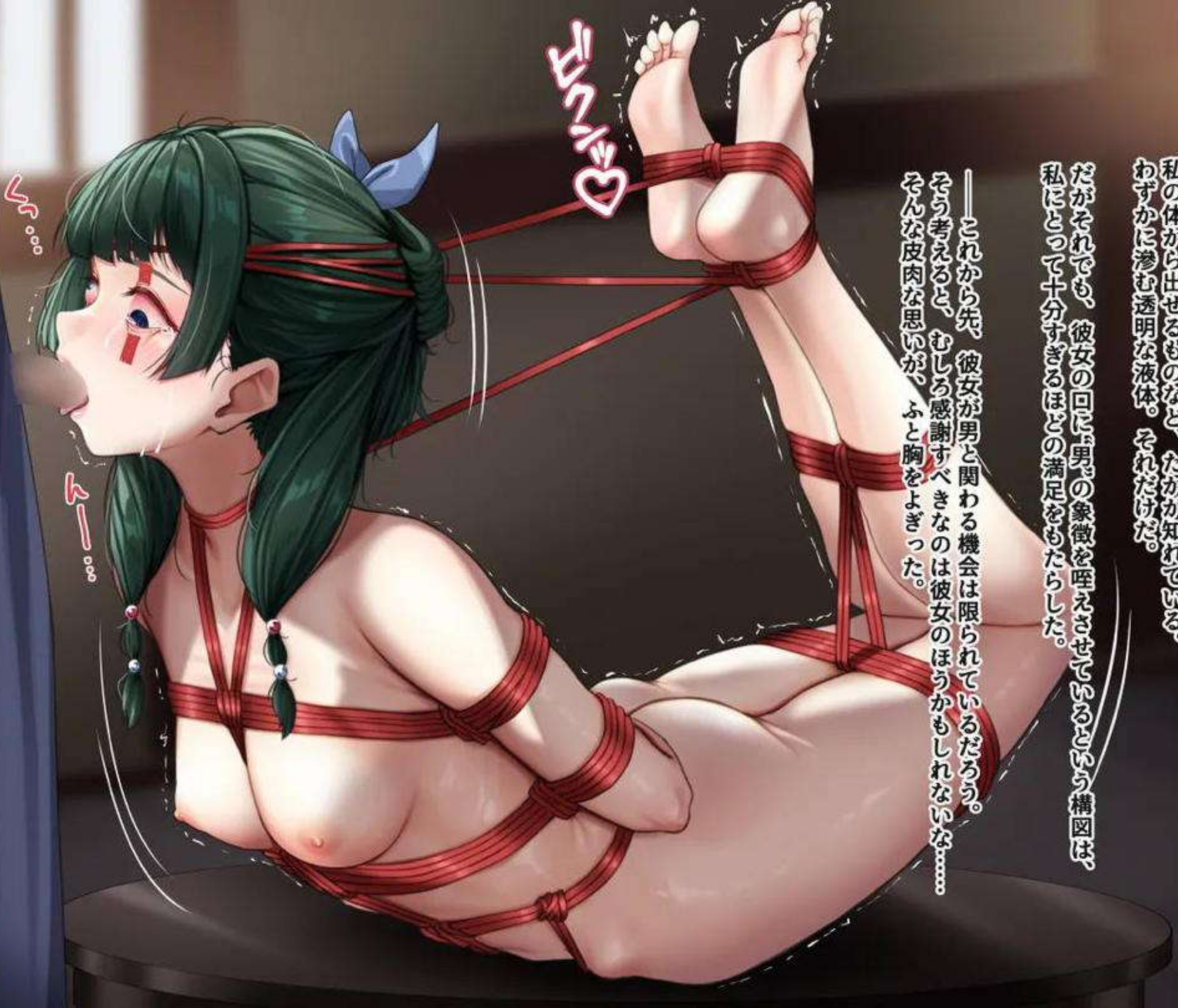
だがそれでも、彼女の口に、男の象徴を咥えさせているという構図は、
私にとって十分すぎるほどの満足をもたらした。

——これから先、彼女が男と関わる機会は限られているだろう。
そう考えると、むしろ感謝すべきなのは彼女のほうかもしれない……
そんな皮肉な思いが、ふと胸をよぎった。

どくどく♡

く……

んー……



回から性器を取り出し出した瞬間、変な音が聞こえて見るとテーブルの下に黄色い液体が落ちていた。

おそらく、あの体勢のまま机の上に置かれたせいで、腹部が押され、彼女は自らの意思とは関係なく排尿してしまったのだろう。

上からは先ほど私の体から分泌された液と唾液が滴り落ち、下からは彼女自身の尿が静かに流れ出していた。

——奇妙なものだ。

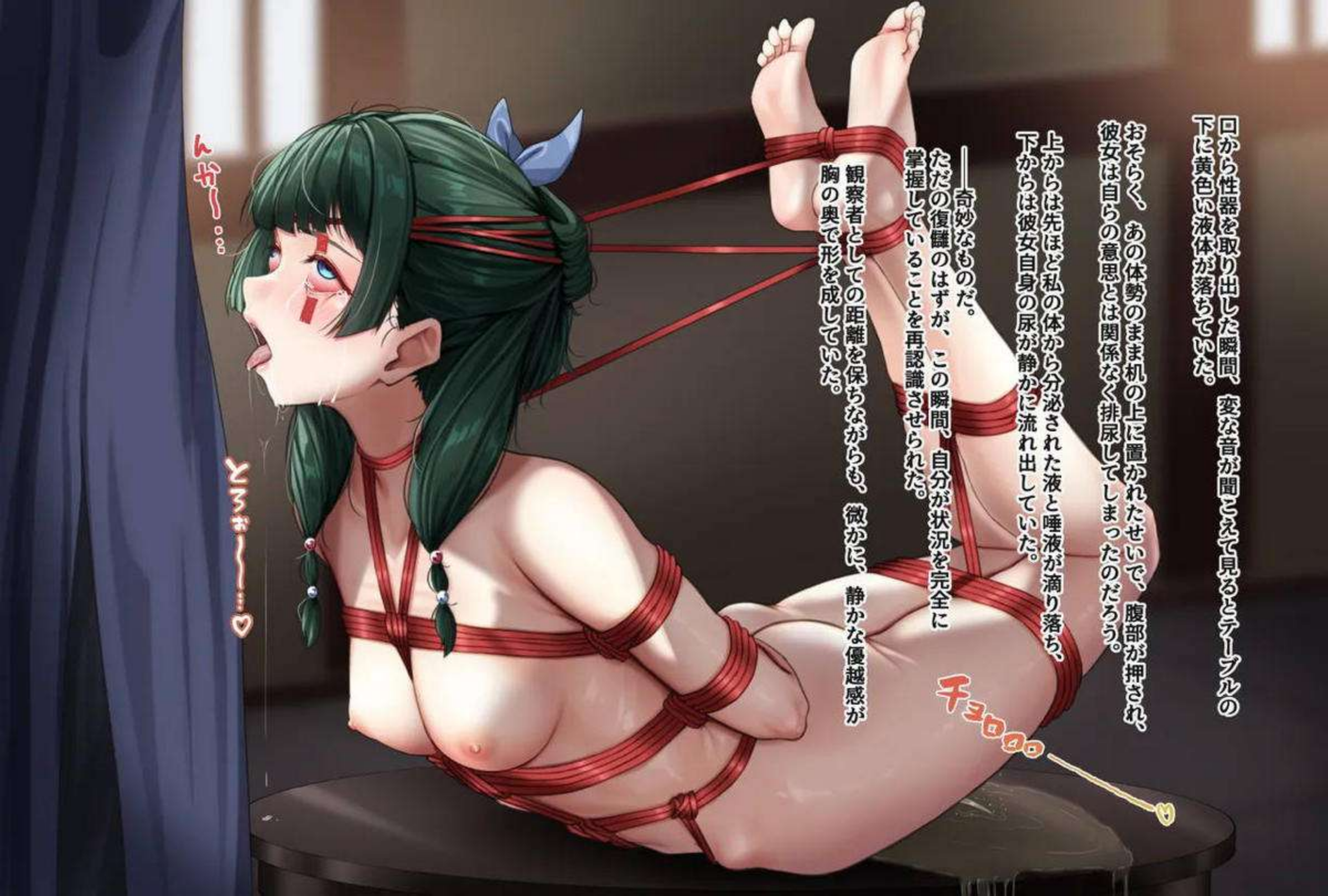
ただの復讐のはずが、この瞬間、自分が状況を完全に掌握していることを再認識させられた。

観察者としての距離を保ちながらも、微かに、静かな優越感が胸の奥で形を成していた。

んがー...

んがー...♡

チヨロロ



彼女の顔は今や、涙と唾液、それに私の体から分泌された液体で、見るも無残なほど汚れ切っていた。

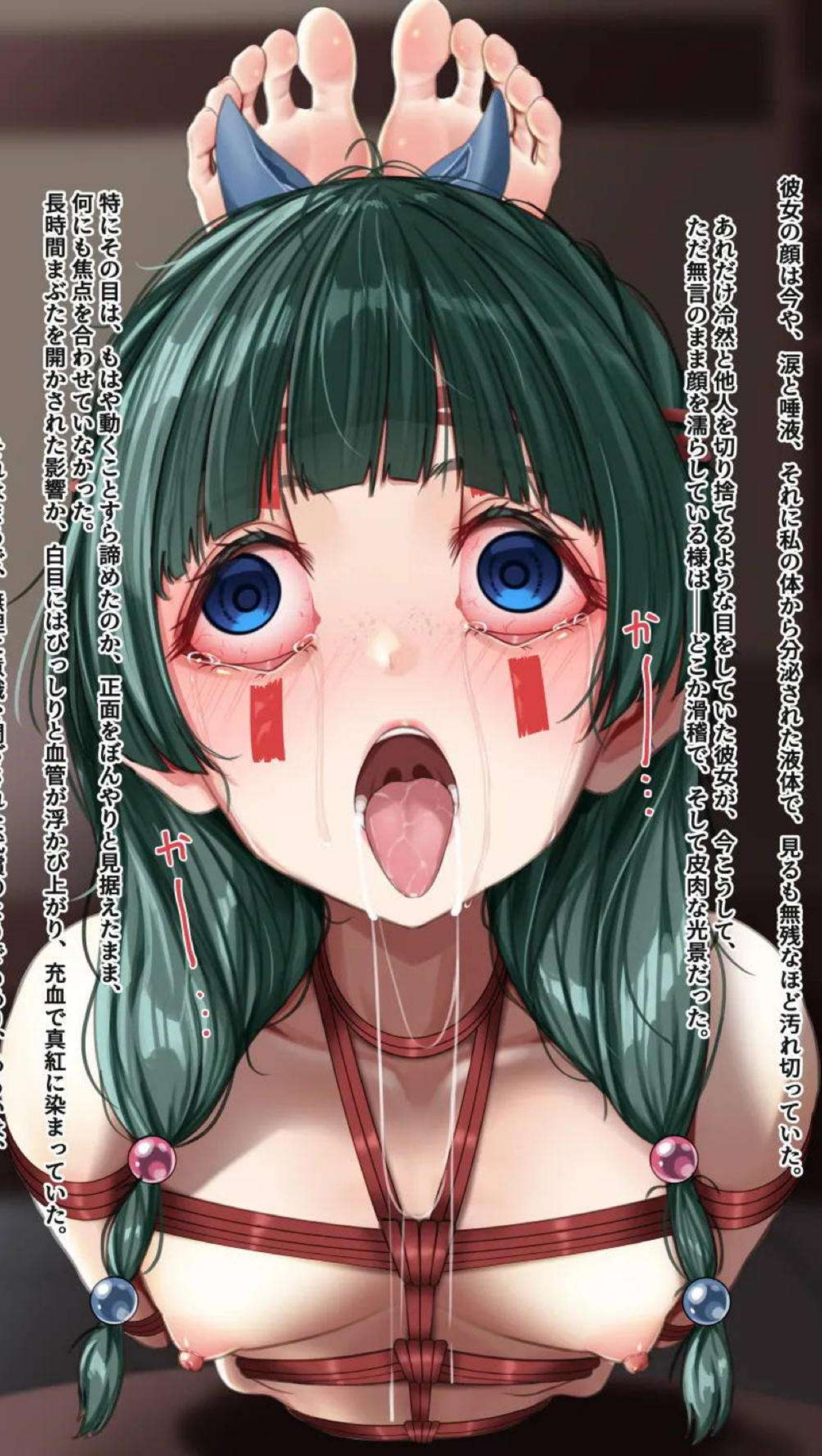
あれだけ冷然と他人を切り捨てるような目をしていた彼女が、今こうして、ただ無言のまま顔を濡らしている様は——どこか滑稽で、そして皮肉な光景だった。

ガ——…

ガ——…

特にその目は、もはや動くことすら諦めたのか、正面をぼんやりと見据えたまま、何にも焦点を合わせていなかった。
長時間まぶたを開かされた影響か、白目にはびっしりと血管が浮かび上がり、充血で真紅に染まっていた。

それはまるで、無理に意識を閉ざされた代償のようでもあり、あるいは、復讐の「成功」を静かに告げているようでもあった。



それでも、しばらくの沈黙の後に、彼女の眼球が――左右それぞれ、まるで別々の意思に従うかのように――ゆっくりと動き出した。

反射か、あるいは覚醒の初期症状か。
いずれにせよ、薬効がまだ残っていることは間違いない。

とはいえ、私に許された時間もそろそろ尽きようとしていた。
これ以上ここに長居するのは得策ではないし、もし誰かが来れば――事態が一変する恐れもある。

そろそろ、痕跡を片付け、元の静寂に戻しておくべき頃合いだ。



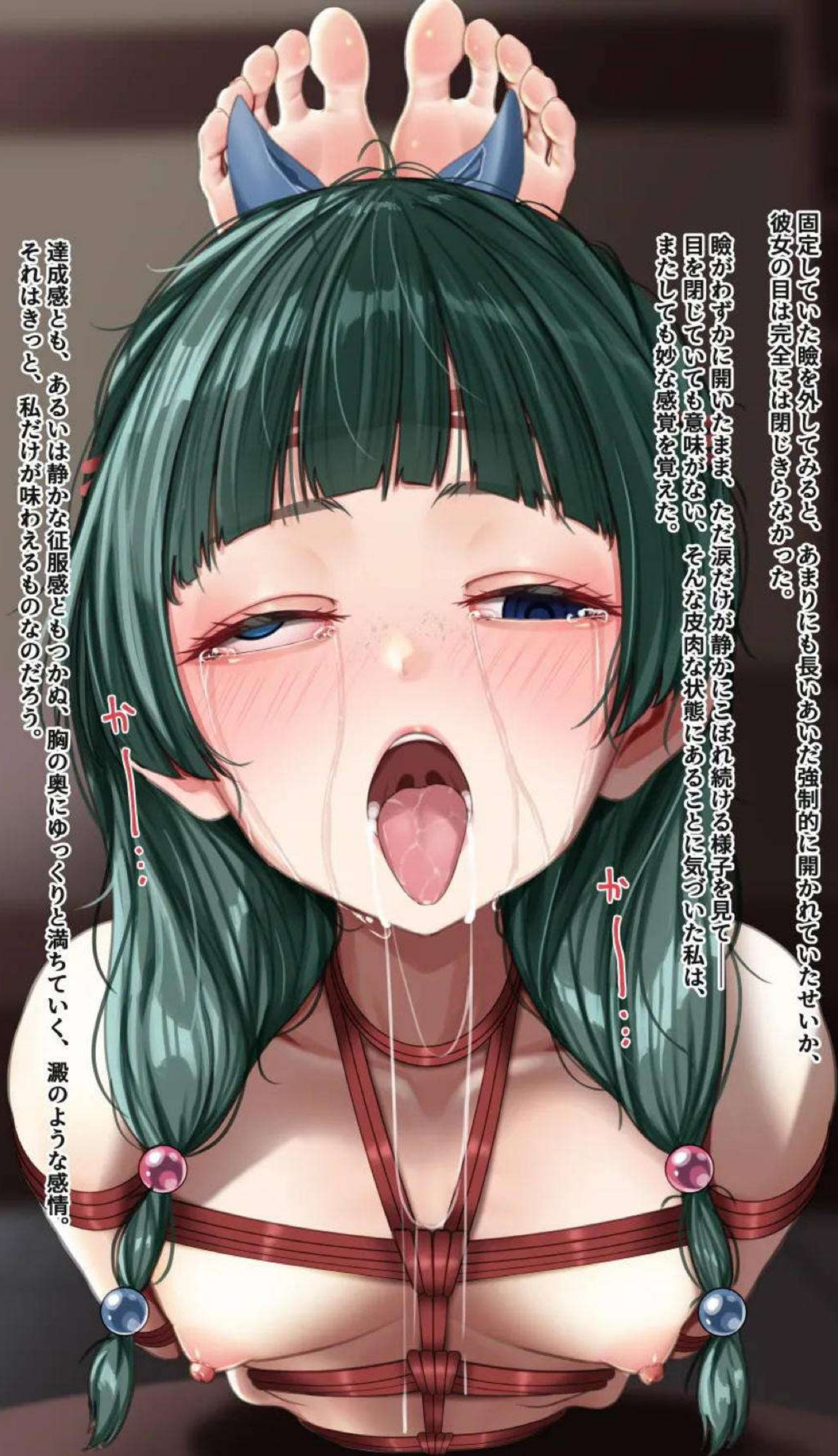
固定していた瞼を外してみると、あまりにも長いあいだ強制的に開かれていたせいか、彼女の目は完全には閉じきらなかった。

瞼がわずかに開いたまま、ただ涙だけが静かにこぼれ続ける様子を見て――目を閉じていても意味がない、そんな皮肉な状態にあることに気づいた私は、またしても妙な感覚を覚えた。

達成感とも、あるいは静かな征服感ともつかぬ、胸の奥にゆっくりと満ちていく、澱のような感情。それはきつと、私だけが味わえるものなのだろう。

かー……

かー……



彼女は、今日起きたことを確実に覚えていないはずだ。
だが、私は——この出来事を決して忘れない。

今後またどこかで彼女と顔を合わせるたび、
ふとした拍子に今日の出来事を思い出して、無意識に微笑んでしまうかもしれない。

そのとき、いくら彼女が聡い頭で真相を推理しようとも、何ひとつ証拠は残されていない。
私の微笑みの理由を、彼女が知ることにはないだろう。

そう思いながら、私は静かに後始末を終え、音も立てずにその部屋を後にした。

がー……

がー……

お前が倒れたと聞いて、来たんだ。

……どうして王氏様がここに？

お前には、もっと大事な仕事がある。

なんで突然、目が……？

……痛っ？

だから言っただろう。何日も昼夜問わず寝ずに身体を酷使すれば、

他のことにも支障が出るって。

いや……だからといって、泣くことはないだろう……？

ポロッ

王 そ、その……すまん。泣き止んでくれ。

猫 ……王氏様のせいです。

王 謝ったじゃないか。いや待て、

なんで俺のせいになる!?

猫 何にせよ、王氏様のせいです。

王 ……。